

第1回青少年問題調査研究会

20181009

中央合同庁舎第8号館416会議室

# 生きづらさを抱える若者の 社会的自立に向けた支援について



古賀 正義(中央大学)

# 講演の次第

- 1 「生きづらさ」という問題の解読
- 2 排除する社会の現実
- 3 「孤立」の生まれる構造
- 4 「不登校なう」からみる学校空間
- 5 いじめの常態化と暴力性の感知
- 6 高校中退者と対人関係の喪失
- 7 中退をめぐる支援環境の疎外
- 8 教育困難高校卒業生の10年を調査する
- 9 非行少年の矯正教育と出院後の社会
- 10 まとめ 社会関係資本の大切さ

# 1 「生きづらさ」という問題の解読

・「生きづらさ」という言葉が今日青少年問題によく使われる。社会の中に自分の居場所がみつからず、将来への展望が描けない疎外された孤立状態をさすというのが適当である。

・原因は多種多様であり、周囲の対人関係のなかで精神的に生きづらい人もいれば、貧困による生活苦から経済的に生きづらい人もいる。作家・雨宮のいう、一種の「自分病」と呼んでいい。

例えば、以下の文章は、20代後半に始まったひきこもりの様子を、当事者である若者自身が書き記したものである。

「自分のことが嫌いになっていく僕は、それから、髪の毛もボサボサ。……普通の人間とみられるよりも、変な人間と思われる方が楽だと感じていました。そして、この生活が日常化されるようになっていき、冬の苦手な僕は家にいる時間も(どんどん)長くなっていきました。」(①古賀・石川2018＝編著)

- ひきこもりになる原因は依然明確になっていないいじめや不登校などの学校問題、就職・資格試験や初職・職場体験など就労問題、あるいは対人不安や発達障害など精神的問題など、これらどれもが複合的に重なり合って「ひきこもり」現象を生み出すといわれる。
- 筆者の参加した東京都調査では、聞き取り事例で、クラスの内いじめ—家庭内での暴力—友人との傷害事件  
補導・少年院—職場での孤立・衝突—ひきこもり  
といった経路を辿った意外なケースも報告されている。
- 従来の理解と異なり、不登校からの継続によるひきこもりは3割程度。むしろ卒論や就職等による移行(トランジション)の不安・危機が多数を占めた(②古賀2012=論集)。

## 例えば、都調査での「ひきこもりからキレた事件」例

中学生の頃から父親との折り合いが悪く、暴力を振るわれることがあった。高校に入ってから落ち着いたので、このまま何とかやっていけるのではないかと思ったが、3年生のときに父親をボコボコに殴るということが起きた。高校卒業後は大学浪人することになったが、ひとりで浪人生活させるのはかわいそうなので、全寮制の予備校に入学させた。しかし、数ヶ月で戻ってきてしまい、アパートで宅浪生活。その年はA大学に合格した

08年春、夫と子ども2人と食事をしているときに長男が入ってきて、再び夫がボコボコに殴られた。フリー スクールに連れ出しを依頼。何日も経たないうちに戻ってきてしまった。もう暴力は振るわないことを約束させて、アパートに住まわせている。

# ひきこもりにみる問題の複合性・多重性・機会性

東京都青少年治安対策本部(2008)19事例のひきこもり家族聞き取り調査から

受験、就職の失敗

職場不適合

不登校(学校  
経験の喪失)

非行・暴力  
(反社会的  
行動) ある  
いは、被虐  
待経験

リストカット・拒食症・  
容姿恐怖・オーバードーズ  
(実存への不安)

精神疾患  
発達障害  
(親、きょう  
だいを含  
め)

いじめ、友人関係  
の困難(対人不安)

- ひきこもりに典型的なように、周囲からは動機や現れの意味がわかりにくく、本人自身が生きることに苦痛を感じ続ける場合は少なくない。日常の生活を自己否定や孤立感覚が襲う。社会参加の回路を失い、「ダメな自分」(自己効用感の喪失)との対話を際限なく繰り返す。
- それゆえ、問題の現れからみて、コミュニケーション障害やレジリエンス(耐性力)欠如などによる本人自身の問題、「個人化した病」を指摘しても解決できない(③古賀2016 = 有斐閣)。



## 2 排除する社会の現実

- そのため、本人自身がきまじめに生きようとすればするほど、不安を回避しようとするほど、社会と隔離した暮らし方となり、内閉化した問題が深刻に増幅していくことになる。
- こうした問題をモラルハザード(道徳性の混乱・喪失)から理解すること(規律統制型の対応)はもはや限界。むしろ若者自身と周りの他者との関係性の歪み(生まれつきからの彼らの成育を取り巻く社会環境の変質)にこそ注目しなくてはならない。

# 日本型循環モデルの瓦解

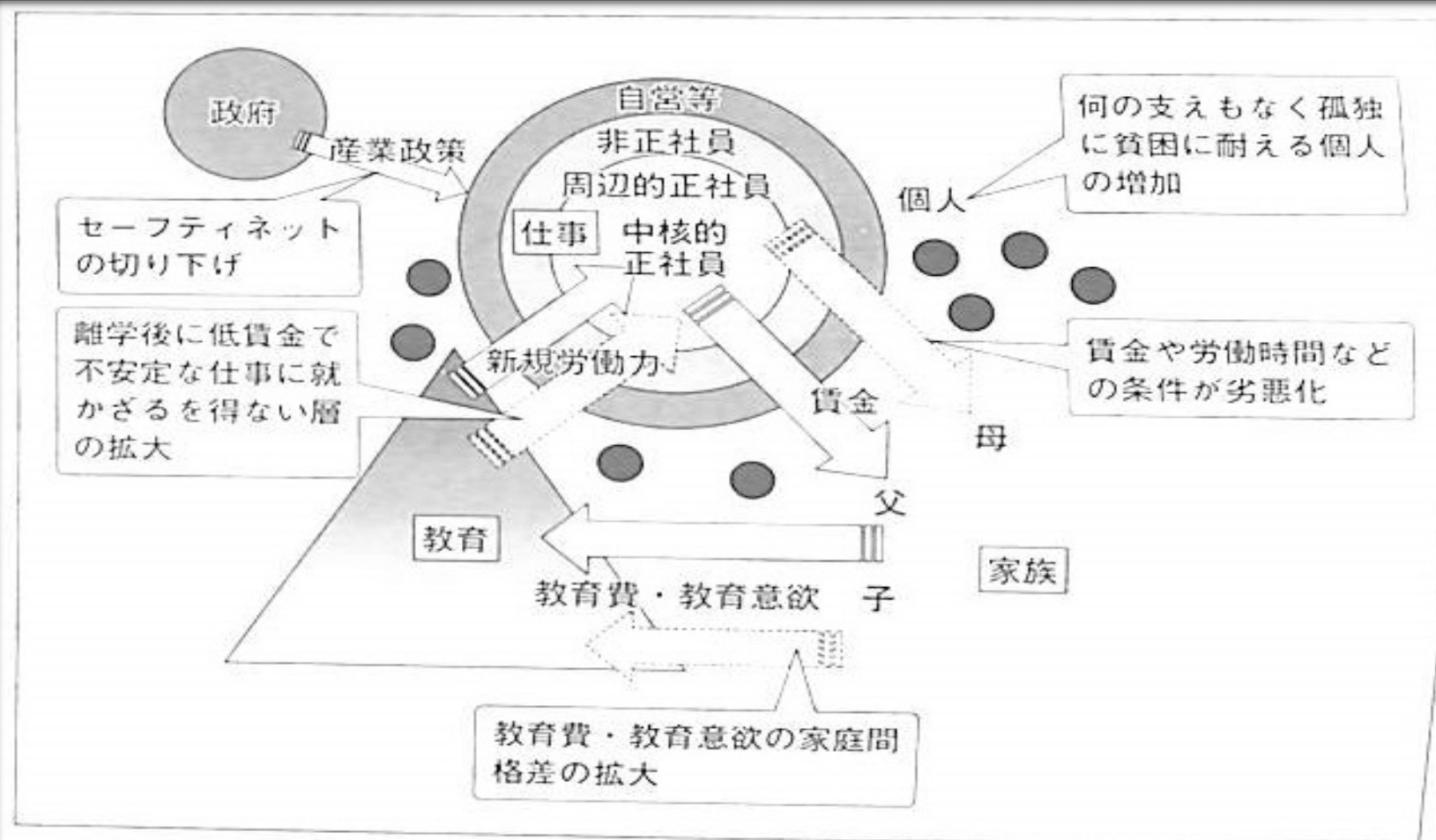


図 1-1 戦後日本型循環モデルの破綻  
〔出典：本田由紀「社会を結びなおす」(岩波書店 2014)〕

# 「社会的排除」問題と

## 従来の青少年問題には違いがある

(④古賀2015・教社研 = 経済学者Room,G.1995参照)

### 多面的で複合的な「不利益」(困難) の理解が必要

→いろいろな問題は相互に重なりあっていて、問題の原因と結果(症状・現象)とは表裏の関係にある  
ひきこもりは不登校の延長といった因果的な理解が  
かえって改善の障壁になることがある  
(「脱・原因探し = 脱因果論」が必要)

# 地域コミュニティでの支援資源の 「利用不能」が問題

→個人の資質・努力の不足 = 自己責任あるいは  
若者の家庭の責任だけが問題ではなく、  
周りの社会・他者に頼れない剥奪や互いの格差  
のある環境 (環境が管理された社会の現実) に  
こそ問題をみる必要がある

(「脱・個人化 = 向・社会化」の視点が必要)

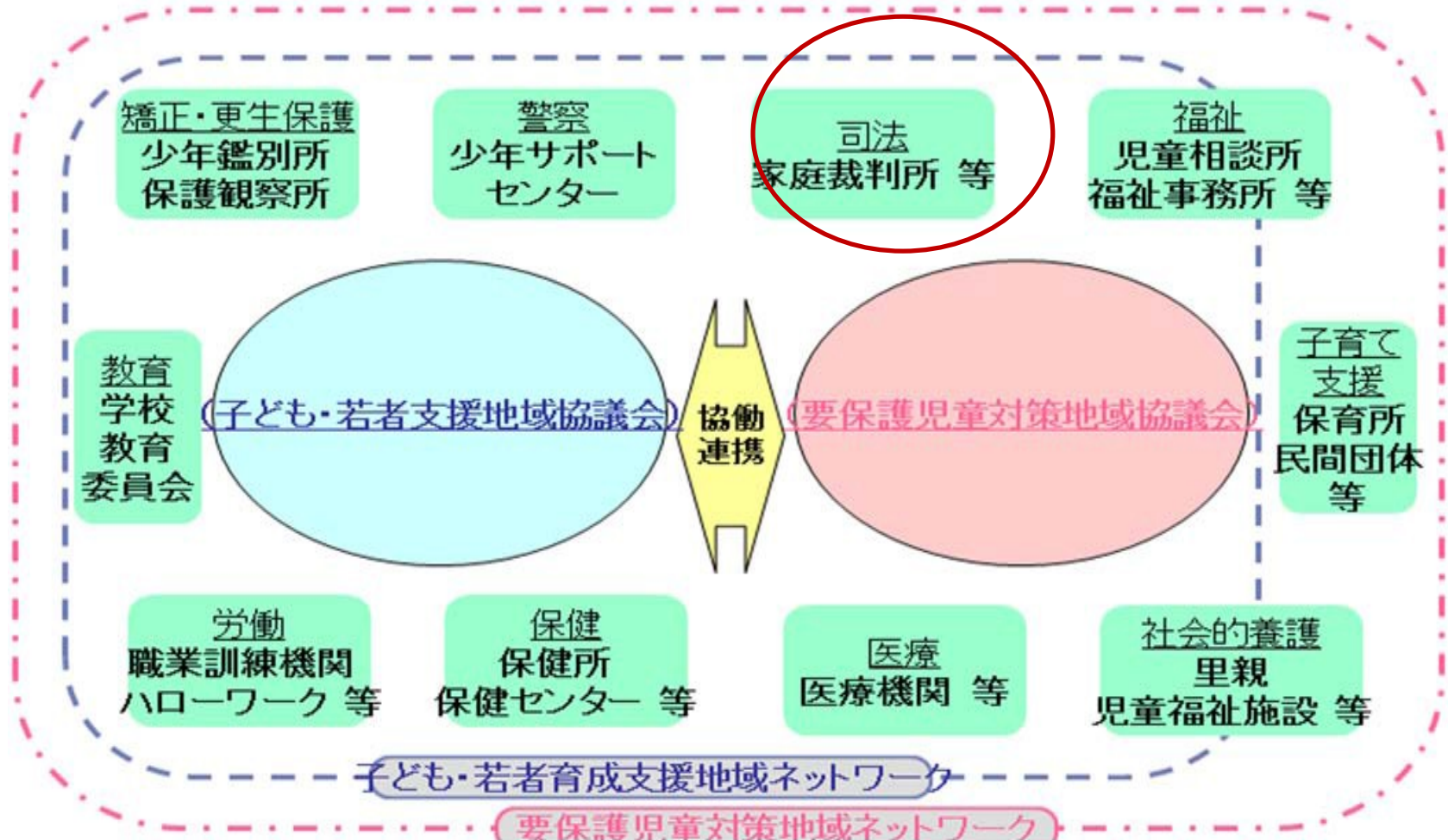
# 年齢の上昇に伴う「不利」の感覚 の醸成と深まりが進行

→ライフコースの進展(「生まれつき」からの発達障害の理解不足も含め)に伴って、問題が拡大し回復不可能になる。*何が変化のきっかけになるかはコンティンジェント(偶然的)だが、他者との出会いや居場所の確保などで状況は大きく変化(タイミングの合う支援 = 「切れ目なさ」が重要)*

- そこで、生きづらさを抱えていると読み取れる時、本人の自己責任と切り捨て排除することなく、困難な課題に応じた包摂のための支援のセーフティネットを提供し続けることが必要となってくる。
- 「青少年健全育成」の基本的ミッションは、社会的に排除される者 (⑤古賀2006 = 「刑政」) の生まれない安全安心な社会を構築するため、健全育成環境の総合的な調整や整備にあたるもの (例えば、少年法第1条の精神) なのだから。

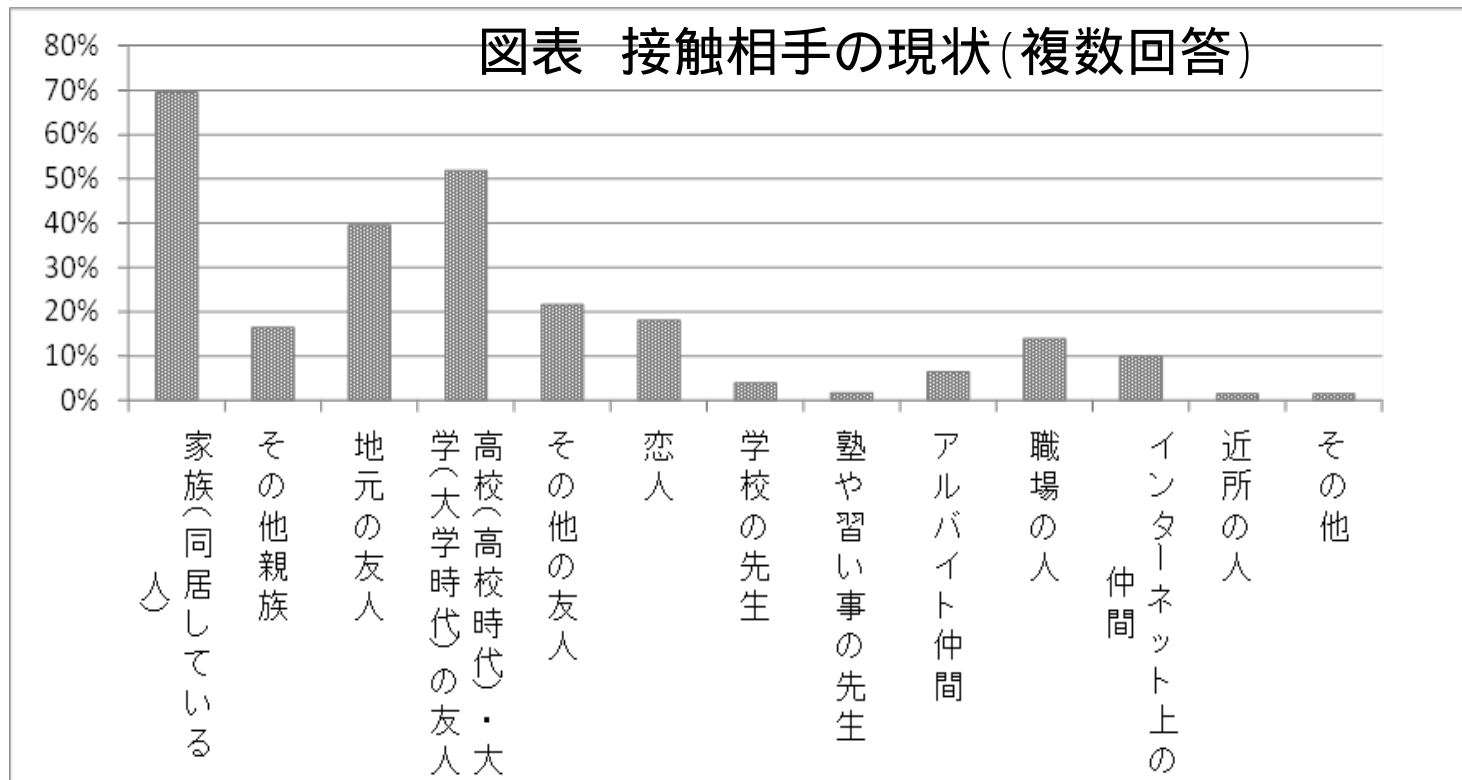
# 内閣府の子ども・若者支援地域協議会の事例 = 地域ネットワーク支援の要請

→要保護児童対策地域協議会との協働・連携イメージ



# 3 「孤立」の生まれる構造

内閣府『子供・若者の意識に関する調査(平成28年度)報告書』





# 「コアな他者」の偏位 (⑥古賀2017＝内閣府意識調査)

図表 性・年代別の接触相手

		N	家族(同居している人)	その他親族	地元の友人	高校(高校時代)・大学(大学時代)の友人	その他の友人	恋人	学校の先生	塾や習い事の先生	アルバイト仲間	職場の人	インターネット上の仲間	近所の人	その他
【性別】	男性	3063	64.1	11.1	37.6	48.8	19.4	14.8	4.4	1.6	5.2	13.6	10.3	1.4	1.7
	女性	2937	75.1	21.9	41.4	55.0	23.8	21.3	3.3	1.8	7.7	14.3	9.8	1.5	1.0
【年代別】	15～19歳	1961	71.4	11.9	47.6	69.9	19.7	14.8	4.9	2.9	6.0	2.8	10.4	0.5	0.8
	20～24歳	1947	68.0	15.2	36.8	51.4	20.9	23.1	5.1	1.1	9.3	13.8	9.2	1.4	1.2
	25～29歳	2092	69.0	21.6	34.4	35.2	23.9	16.2	1.7	1.2	4.2	24.5	10.5	2.3	2.0

- 日々の接触相手が多い層と、家族などとだけしか接触しない層を比較してみよう(多種接触群は全体の約半数あるのに対して、1種接触群は2割強にもものぼる)
- 生活の充実度からみる。「充実している」「どちらかといえは充実している」とする割合で見ると、多種群が他群よりきわめて高い割合となる。具体的には、多種群が22.2% + 54.5%で約8割が「充実している」と回答しているのに比して、1種群が17.6% + 37.5%で6割弱にすぎず、その差は大きい。
- 居場所と思える所を回答してもらうと、多種群は多くの場所で1種群より高い割合を示した。例えば、「自分の部屋」では、「そう思う」の割合で、それぞれ66.6% > 55.3%となる。比較的他者との関係性に関わらない場と思えても、他の場の居場所感覚の広がりがないと、強く感じ取ることができない。「家庭」(48.4% > 28.0%)の結果もまったく同様である。それ以外の場の回答でも、「どちらかといえはそう思う」の割合まで含めると、「学校」(55.6% > 34.5%)、「職場」(45.8% > 33.3%)、「地域」(65.9% > 44.9%)と、群間差が非常に大きくなる。

# 社会参加状況・将来の自分像への影響

図表 接触人数別の社会参加状況・将来の自分像

	N	【社会参加の活動】						【将来の自分】				
		映画などの鑑賞	スポーツ	自然体験	観光	地域行事	あてはまるものはない	何でも話せる人がいる	共通の趣味を持った仲間がいる	自分の収入で暮らせる仕事についている	周りの人や社会の役に立っている	なりたい自分に近づいている
接触相手1種類	1245	32.8%	18.5%	9.9%	17.1%	4.8%	43.7%	17.8%	15.0%	13.9%	10.2%	10.4%
接触相手2種類	998	49.8%	26.7%	13.9%	32.6%	9.6%	28.7%	21.1%	18.8%	18.0%	9.1%	10.2%
接触相手3種類以上	2000	62.6%	37.4%	23.8%	47.7%	21.7%	17.7%	33.6%	29.5%	23.3%	14.9%	17.5%

- 学校生活を起点として形成される友人関係の広がり = 接触相手は、20代後半になっても消えない。ネットの仲間関係なども、こうしたリアルな関わりを媒介としているため、単体としては広がっていかない。また、職場・バイト先の人間関係もしだいに広がりはするものの、若者の日常の関係への影響は限定的である（20代後半で、接触相手としてあげられるのは20%代）。「学校」に偏在してしまう、場の制約という構造がある。

# 4 「不登校なう」からみる学校空間



僕は僕でよかったんだ  
フリースクール東京シュレの25年

不登校なう  
～居場所を求める私たち～



NPO 法人 東京シュレ



不登校の子ども達による初の不登校をテーマにした映画と  
東京シュレの25年の歴史を描く映画



不登校なう

～居場所を求める私たち～

僕は僕でよかったんだ

～フリースクール東京シュレの25年～



「不登校」と聞いて、みなさんはどんな生徒の  
学校問題を思い浮かべるのだろうか？

「不登校」≠「学校嫌い」 否、教室での関係の病  
このVTRの3事例では、……

ルーティーンな拘束ある生活（「不定愁訴」）

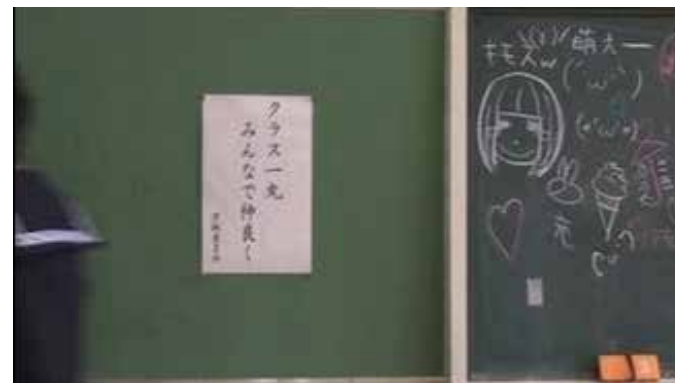
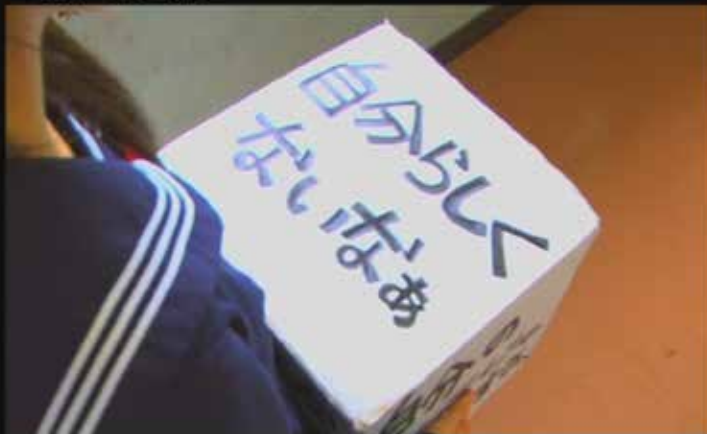
いじめの常態化の恐怖

優等生を演じることのバーンアウトの危険

学校生活に潜む「不安」「リスク」の数々が出てく  
る。場面のディテールに気をつけてみてみたい。

映画「不登校なう」～居場所を求める私たち～ 著作：特定非営利活動法人東京ジョーレ (2011)

第1話 「あずさの場合」



映画「不登校なう」～居場所を求める私たち～ 著作：特定非営利活動法人東京ジョーレ (2011)

第1話 「あずさの場合」



## 学級内での仲間関係の変質

「島宇宙化」(宮台真司)の指摘 = 学級内での小グループの乱立・葛藤とその変動

例えば、

「いつメン」=いつも一緒のメンバーを大切にする

「ぼっち族」=密着する仲間から離れ一人を好む装い  
グループの内輪の話題や語り方など、「小さな物語」  
が重要になる

共同体・コミュニティ(一致団結・協同生活の場)ではなく  
なりつつある今日の学級



FIC = フルタイムインテIMATEコミュニティの登場

- 24時間いつでもどこでも(情報学で言う、ユビキタス化)相互交信し続ける仲間関係が可能。気の合う選択的人間関係の優位(→LINEの世界)

共振的コミュニケーション=外見や会話の仕方、好きなアイテムなどの「ノリ」が重要になる。一瞥して仲間を見つける感覚。

- 価値観や親密さの状況を通したやりとりと確認の作業を伴う、人格的コミュニケーションが大きく減少する

## 5 いじめの常態化と暴力性の感知

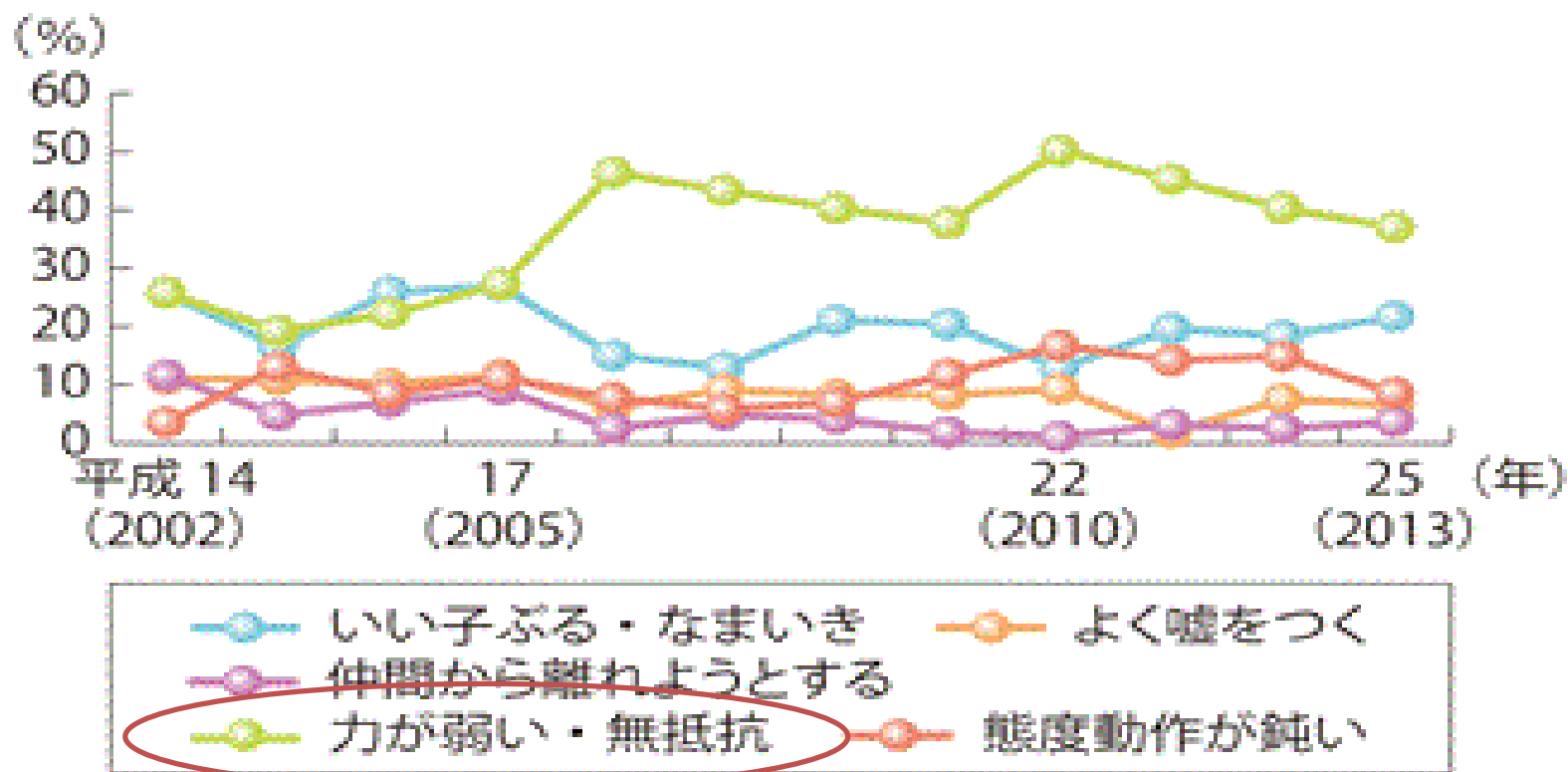
- ・「個」の提示 = キャラを煽られる社会の空気。  
「演じる自己」の失敗への恐れ。教室や学級の生活が、生きづらさのリスクを助長
- ・「友だち地獄」 (土井2008) といわれるような閉じた仲間関係の比重の増大。対人関係の難しさ・対人不安の起こりやすさ。「キレる」行動の出現。
- ・反社会的でなく、非社会的な逸脱、個人の内面を傷つけ、トラウマを生み出す見えにくい問題行動の拡大 = 代表例は、「いじめ」や「ハラスメント」

# いじめの多様で曖昧な態様(平成26年)

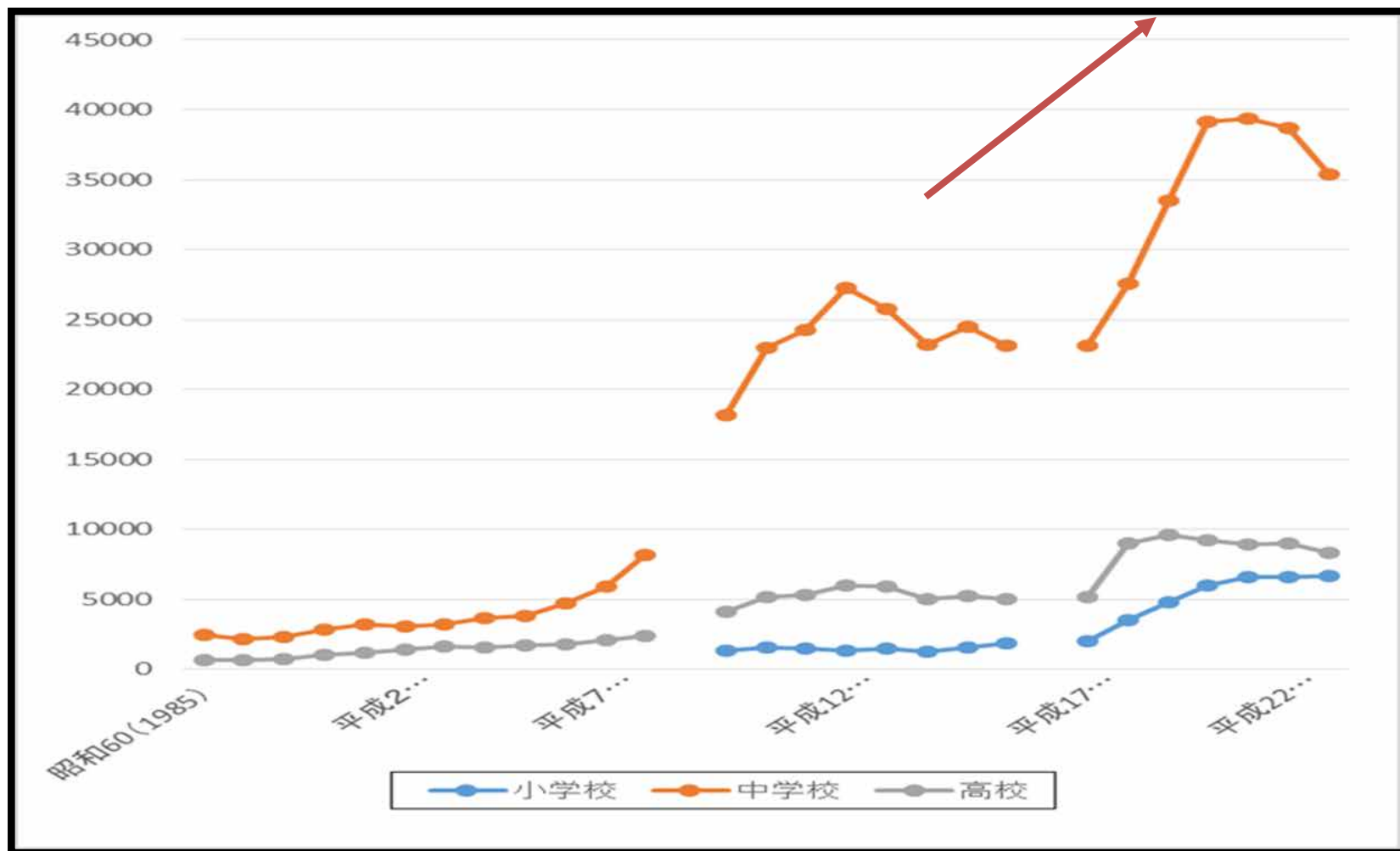
区分	中学校	
	件数(件)	構成比(%)
冷やかしゃからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。	121248	64.5
仲間はずれ、集団による無視をされる。	35932	19.1
軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。	41829	22.2
ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする。	14050	7.5
金品をたかられる。	3863	2.1
金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。	13356	7.1
嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。	14655	7.8
パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる。	7898	4.2
その他	8224	4.4

# いじめ事件・被害者の特徴

(2)原因・動機別(主なもの)



# 校内の暴力(ハラスメント)認知増大



- 「いじめ事件」の難しさは、加害者があるいは被害者さえもが、簡単に特定できないこと。
- 大津の事件でも、当初いじめの生徒たちといじめられていた生徒との関係は、「プロレスごっこ」と理解されていた。今日の中学生における「ノリ」や「KY」を大事にする人間関係からいえば、いじりを深掘りする愚は避けられねばならないが、いじりに参加しないことも友達でなくなる怖さがある。
- キャラとしていじられるか、いじめられるかは、紙一重という感覚。

- いじめの対象者には言いなりになるなどといった負の性質が付与され、時に流暢に英語を話すといった優秀性さえ烙印 = スティグマの対象となる。
- ここでは仲間関係にとって説得的な排除の条件 = いいなり・目立つ・異型が見つからなければいいのであり、いじめられる人への攻撃誘発性 (vulnerability)を発見することは教室内の偶発的な出来事 = 機会原因の現れ(例えば、突飛な発言、下手なかぶせ等)に依拠することになってしまう。リスク社会の出現。

# ここまでのまとめ

- 教室が政治空間化し、関係のリスクへの不安が常態化してしまう。孤立は教室から起こる。  
四層構造 = 被害・加害・観衆・傍観 が成立。
- 家庭は不安解消の場でありながら、困難を集中的に抱える。 ↓
- 曖昧ないじめの性格、不登校の対人不安、ひきこもりの生きづらさ。  
・・・閉じた限られた対人関係の資源のなかで共通する心理・行動様式がある。

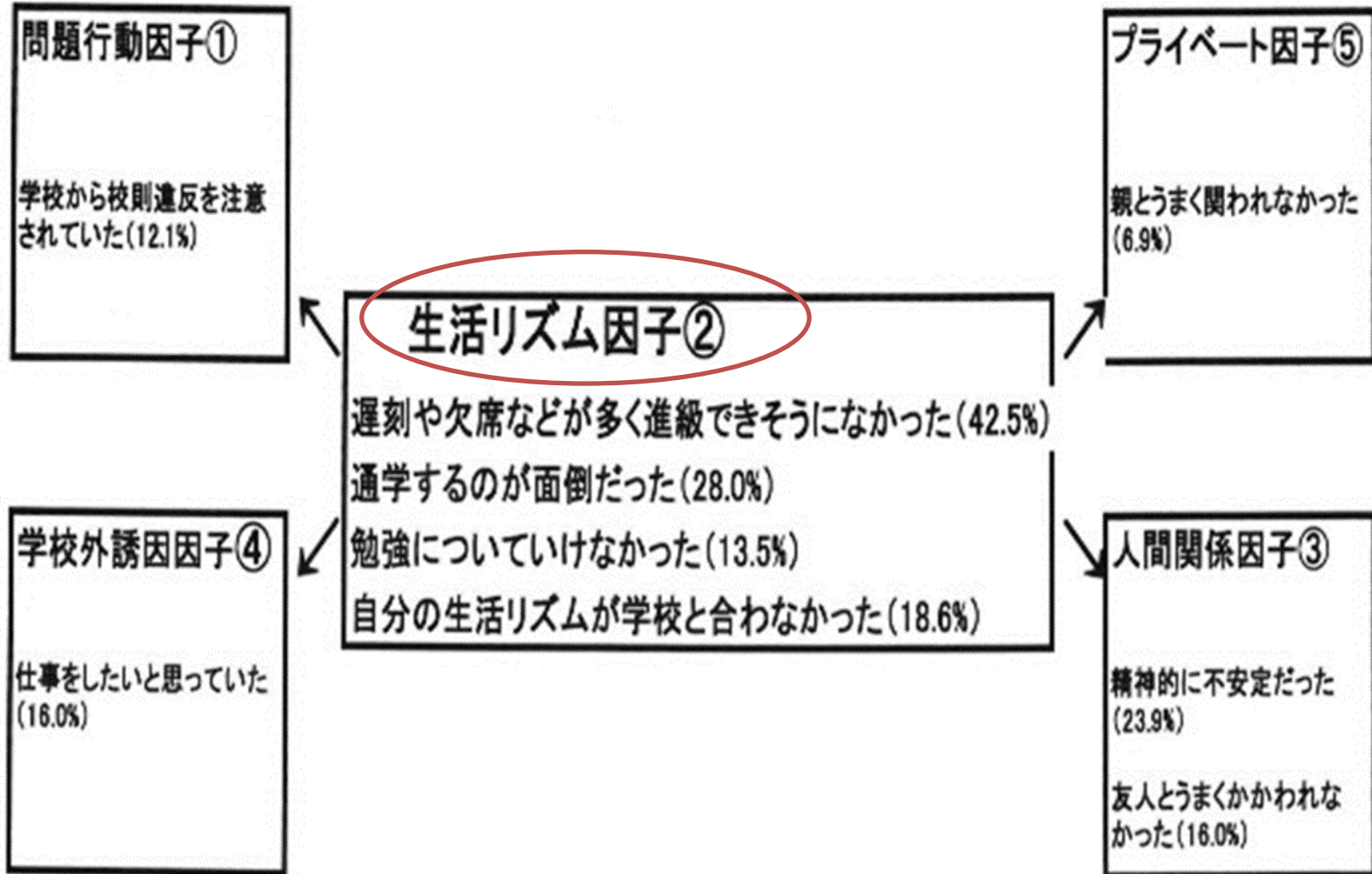


## 6 高校中退者と対人関係の喪失

- 実際、都立高校中退者の悉皆調査(⑧古賀2015)でも学校生活・学習行動の問題に関して、家庭や友人関係などの対人関係の影響に注目せざるをえないことが多々あった。
- もちろん本人にも努力すべき課題はあるのだが、家庭や学校、あるいは地域社会の援助があったら、退学せず切り抜けられたのではないかと思うことが少なくない。
- 中退者自身は、やめた理由を、忍耐力がなかったとか持続力がなかったとか自己否定的に語る事例がきわめて多かった。

- 中退の主な理由がまず「生活リズムの不具合」であることは特筆される。
- 「遅刻や欠席などが多く進級できそうになかった」、「通学するのが面倒だった」、「自分の生活リズムが学校と合わなかった」など家庭の生活習慣(ハビトゥス = 身体化した文化資本)(ブルデュー,1991)と関連する理由が高い割合となっていた。
- 学校から校則違反を注意されたなど問題行動あるいは非行行為の項目は思いのほか低い割合であった。

# 中退発生の要因分析



## 図表 進路未決定者と中退者の 「卒業できるあるいはできた要因」の認識

	中退者	進路 未決定者	両者の 差
友人や仲間からの手助けがあったから(あること)	13.2%	50.2%	-37.0
学校に自分の居場所があったから(あること)	4.2%	40.4%	-36.2
家族の理解と協力があったから(あること)	10.0%	37.9%	-27.9
アルバイトができたから(あること)	2.7%	28.4%	-25.7
悩みを相談できる人や場所があったから(あること)	16.2%	39.9%	-23.7
人付き合いがうまくできたから(あること)	30.1%	43.7%	-13.6
先生の理解や応援があったから(あること)	18.7%	31.5%	-12.8
働くための知識や経験が学校で身についたから(あること)	12.3%	15.3%	-3.0
職業体験やインターンシップなどの機会があったから(あること)	2.9%	4.9%	-2.0
決まりごとがしっかり守れたから(あること)	15.3%	15.0%	0.3
通学しやすかったから(あること)	25.2%	23.9%	1.3
勉強の指導が丁寧であったから(あること)	11.1%	8.6%	2.5
学校が自由を認めてくれたから(あること)	18.3%	12.2%	6.1
経済的なゆとりがあったから(あること)	12.7%	4.3%	8.4
勉強することの意義がわかったから(あること)	23.1%	11.0%	12.1
規則正しい生活ができたから(あること)	30.5%	16.5%	14.0

・卒業が可能になる要因として、「友人や仲間からの手助けがある」や「家庭の理解と協力がある」、「学校に自分の居場所がある」などで、評価が低かった。

中退者は、学校生活を支える対人関係や居場所などの「社会関係資源」を欠いていると感じていた。(街の難民高校生が、風俗・JKビジネスのやさしさに頼るあり様を想起してほしい。)

・中退者に聞き取り調査をしてみた。すると、

「起こしてくれるはずの保護者が朝も働いていて家にいない」とか「人に会わず没頭できる夜に活動するので朝がつらい」など、対人関係や居場所の不在による学校・家庭環境からの疎外状況が繰り返し語られた。援助的な環境のはく奪が生活リズムを歪め、中退へと導くのである。

・聞き取りをすると、「先生も学校も嫌いじゃない」が、

「私生活が揺れてくるともう学校へ行くどころじゃなくなっちゃって、家に引きこもっちゃったり、リストカットしたりとか。」といった声が聞かれた。